四、日本勞働組合運動の情勢（其一）

——日本勞働組合運動の重要性について——

一、日本勞働組合運動の隆昇

翻つて我國の勞働組合運動の情勢を見るに之帝日本資本主義の発展の過程を最も端的に反映して居る。

我が組合運動は明治二十年代にその最初の出現を見たが明治末年の恐慌期に帝と消滅し、後欧洲大戰に至る迄極めて困難な過程にあつた。我が組合運動の斯くの如き困難は蓋し次の如き諸點に基くものであつて、之等は今尚我が組合運動発展の障碍たる點に於て残りたい

一、産業的基礎の弱い企業に於ける勞働者の組織に数々の恐慌に際して崩壊する一方、大工場其他の基礎強き企業は大部分は國家資本乃至は國家の特別擁護の下に置かれて生長したので官僚的圧迫のために組合生長の餘地がなかつた

二、初期の資本主義的雇工業はその利潤を未熟練工の酷使と極度の搾取に求めたので、資本家階級は自由なる搾取を妨ぐる如き一切の勞働者の組織に反対した

三、政治的には社會政策其他の共濟施設に資本家の自由なる搾取の障碍をなすものとして拒否せられたので、諸外國の如く、かゝる施設の媒介により勞働者の團結を促進する機會がなかつた

四、加之急迫に仕上げられた我國資本主義内部には、我國特有の封建的遺制たる家族制度は深く根を張りこの制度に供存する因襲と共助關係と勞働者の階級的生長と自覺を阻止した。即ち、資本家階級はこの遺制を利用することによつて溫情主義、家族主義、勞資協調主義に対する勞働者の幻想を繕いだ。

五、勞働者の大部分は農村より移動し来たる百姓、産業が未熟練工の酷使と搾取を主眼とするのと相俟つて、勞働者の勤續年限は比較的少なく（特に我しいのは我國に主要産業たる紡織産業に従事する女工のそれである、紡織女工の平均勤續年限は最近に於ても尚二年半を出でないこれがため團結と訓練の要素を欠いた

かくて我國に於ける勞働組合運動はその特殊の環境の中に於て久しく生長の機を得なかつたが、欧洲大戰による日本資本主義の躍進を契機として急に始めてその基礎を見出した。即ち、欧洲大戰中に於ける日本資本主義の生産力の増大と市場の拡大は、巨大なる勞働階級を生産し、勞働に対する需要の急激なる増大と資本主義の一時的上昇傾向に伴ふ勞働の攻勢は、一般社會主義運動と共に勞働組合運動を確立するに至つた。

二、邦國勞働組合の特殊性

我等はこの欧洲大戰を契機とする我國組合運動の發展の過程に於て、二つの特徴を認める。即ち、一つは勞働組合の分立狀態の發生であり、他は我が組合運動が社會主義運動との間に有縁し来つた不可分の關係である。

先づ勞働組合の分立狀態の発生—勞働の攻勢に乘じて發生する勞働者の團結は職場又は工場別に、或は有力者又は地域的軍閥を中心として、極めて分散的狀態を以て出發點とするを常とする。我が組合運動もそれであつた。然るに欧洲大戰の終熄と共に襲ひ来れる世界的恐慌は、かゝる發生期の勞働組合を、その分散狀態のまゝで、個別的に資本の攻勢に對抗せしめた。その結果は發展の初期にある組合をして、個別的に、早熟の域に達して固定化せしめた。個別の組合は地域的乃至は職業別による狹小たる範圍に追つめられ、その範圍に於て僅かに戰闘的職分を小じんまりと具備する程度の組織に止まつた此の分散狀態は、一工場主乃至は小範圍の資本家を以て闘爭の相手とする初期の組合運動に於ては比較的矛盾を来さず、從つてそのまゝ安定する傾向を生じた。

次に社會主義運動と組合運動との關係—我が組合運動は久しくサンヂカリズムを指導精神としたので、勞働組合は日常利害の一致と同時に思想的政治的見解の一致をもその存立條件とした。この傾向は次いでロシヤ革命の影響を受けても尚既却せず、當時の社會主義運動も亦勞働組合を以てその思想的代表機關と見なす傾向強く、勞働組合即勞働者政黨たるの觀があつた、かゝる傾向は勞働組合運動に一般社會運動に於ける最重要性たる地位を認めるものであるが、同時に、勞働組合に政治的意見の一致を強要する結果は必然に日常利害の一致による大衆的組織への發展を阻止し、且つ分散狀態を永續せしめる結果となつた。我等はこの傾向の發展を其後の指導精神の對立による組合組織の分裂に見ることが出来る、即ち我國の本主義が戰後反動期に入り、之に對し組合組織の分裂の結果となつたが如き（大正十一年九月總聯合運動の決裂、更に其後總同盟内部に於ける政治的意見の對立による分裂の如き、また舊評議會を主動力とする指導精神の一致に基く統一運動の失敗の如き、何れもその特殊性に關するものである

三、我國組合の史的地位

日本勞働組合運動に關する上述の如き分析より我等は現下の我國組合運動の歩む歴史的地位を次の如く要約することが出来る

一、我國の勞働組合運動は欧洲大戰直後の勞働攻勢の過程に於て發生した。從つてその狀態は分散的であつた しかもこの狀態は戰後第一期の恐慌によつて固定化された資本分散狀態に過渡期に於ける狀態であるが我國にあつては統一戰線へ推移する前に壓縮せられた

二、我國の勞働組合運動に過渡期に於ける必然として（勞働者の反抗の過程的形態として）の勞働組合として結成最近政治的意見の一致をその存立條件の一つとした。從つて組合が勞働者の日常利害の一致點に立脚する組織結成に進むことは政治的意見の對立によつて阻止せられた。今日尚この傾向は相當有力に殘存する

三、我國の勞働組合に多くは發生當初より自主自立の傳統を守つて居る この傳統は組合に比較的高度の思想的水準と比較的強靭さを与えたらし、今後の資本主義の動搖に應じて之に抗爭し得る見透しを有する

四、整理統一の段階に達入した我國勞働組合運動は統一戰線と政黨樹立運動とを同時的に展開したので、之が主動力たる勞働組合運動は一面に於て政治的見解による分裂傾向を生じ他面には日常經濟利害の一致により産業別總に沿ふ統一的傾向を生じその間に各種の混亂をもたらしつゝある だがこの傾向は我勞働組合の特長たる政黨と組合との混淆體の分化過程であり、勞働組合運動の新展開の前面である

五、我國に於ては戰後第一期の矛盾の擴大と共に勞働大衆の戰闘化は促進せられ、同時に社會政策乃至は共濟的施設の出現にこれと並行する見透しを存する この見透しは勞働組合に階級的立場に立ちつゝ巨大なる大衆を獲得するに好個の情勢を豫想せしめる 我國に於ては勞働組合の發展性に保證せられてゐる

六、戰後第三期の矛盾の擴大は必然に、資産及び零落せる小ブルジョアを共同戰線に動員する この共同闘爭に於いて勞働者の主動勢力は絶對に必要である 現下の勞働組合にこの主動勢力を確保する基礎である

五、日本勞働組合運動の情勢（其二）

——日本勞働組合運動の最近の傾向とその批判——

一、日本勞働組合運動の現勢

我等は既に日本勞働組合運動の一般的傾向を概觀した この概觀は我等の運動に一定の方向を指示するものである。だが我等はこの一定の方向を把る前に尚嚴正に我等のよつて起つ陣容と更にその陣容内部の傾向を批判して具體的方策を見出さなければならない。

然らば我組合運動の現勢は如何。

我國勞働組合運動の現實の勢力を示すものゝ一つは、我國勞働者の組織率とその闘爭力の集中の様式である。今社會局の調査を精りれば昭和四年末現在に於ける我國勞働者總數四百八十七萬三千八十一人中で勞働組合員數は卅三萬九百八十五人で、この割合は六分八厘に當り、更に之が十七個の全國的組織體と六百十三個の單一團體とに分割されて居る實情にある。

我等は我國勞働組合運動に於ける困難なる事情並に分散狀態によつて来る所以を知るが故に、無條件に、かゝる組織率と様式を以て我國勞働組合運動の無力を叫ぶものでない。だが之等の組織率の中には御用組合又は常なる共濟施設以上に出で得ざる機關に加入する勞働者がその半數を占め、自余の階級的生長性の勞働組合も大工場と主要産業にその堅固なる基礎を置くものは極めて少數であり、加